

各教科を通して活用できる言語力を育てる指導の方法

－小学校国語科「書くこと」の学習におけるメタ言語活動の可能性－

所属校：板橋区立上板橋小学校

氏名：片山 順也

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：言語力・小学校国語科「書くこと」・メタ言語活動・活用

I 研究の目的

1 研究の背景

中央教育審議会答申（2008.1.）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（抄）」の7. 教育内容に関する主な改善事項、（1）言語活動の充実には、「○各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点である。」とある。主な改善事項の筆頭に取りあげられていることは、言語活動の充実が重要な事項であることを示している。さらに、当然のことながら、2008年告示の学習指導要領にも言語活動の成実は、大きな課題として盛り込まれている。

このように、言語活動の充実が叫ばれる背景としては、OECDの国際的な学力調査(2003・2006)の結果（いわゆるPISA型「読解力」の低下）や、その後の全国学力調査のB問題の成績不振が大きいと考えられる。知識基盤社会といわれる現在の国際化社会を生きぬくには、言語活動を充実することで、思考力・判断力・表現力を育成していくことが喫緊の課題となっている。

2 言語活動の充実のためのメタ言語活動

「言語活動の充実」ということで、各教科・領域で盛んに言語活動は、行われるであろうが、活用できる言語力として子どもに意識させ、定着させることができたかという大事な視点が見落とされないかということが懸念される。

このような状況に陥らないためには、言語活動を活動した事実のみで終わらせてはならない。各教科・領域を通して活用できる言語力を育てるためには、各教科・領域の言語活動について、学習者が、それらの「言語活動自体について、客観的にとらえて自覚的に行う言語活動ーメタ言語活動ー」（言語力育成協力者会議（2007））に切り替えていくことが必要である。

3 国語科「書くこと」の領域と活用の範囲

言語活動を通して目指す方向は、思考力・判断力・表現力の育成である。思考や表現を念頭に置いたときに、児童の個人差が顕著になるのは、「書くこと」の

領域である場合が多い。そこで、本研究では、複数の言語活動の領域の中から、国語科の「書くこと」に範囲を限定すると共に、国語科の中で、各教科・領域の言語活動を取り扱う可能性を探ることを目的とする。

なお、前述の「活用できる」の範囲は、大熊徹(2009)の活用型のタイプの分類を利用し、国語科学習と他教科等の学習の範囲として考えていく。

II 研究の方法

1 研究の仮説

以上の背景をふまえて、本研究の仮説を以下の様に設定して、研究を進めた。「各教科の言語活動そのものを学習材として、国語科の時間において、メタ言語活動を設定すれば、児童が自他の表現を振り返り、活用できる言語力を育てることができるのではないか。」

2 研究の経過と方法

本研究は、以下の手順と方法で行ってきた。

- (1) 国語科教育の背景の検討
- (2) 先行研究・文献の収集と整理
- (3) 観察、インタビュー、質問紙による実態把握
- (4) 検証授業を行い、研究の焦点化を図る
- (5) 新たな課題を発見し、検証授業の計画・実施
- (6) 検証授業のデータ整理・検証
- (7) 研究全体のまとめ・成果物作成

III 研究の結果

1 事前調査による実態把握

2010年6月に、所属校の2～6年生児童に質問紙による「書くこと」に関するアンケート調査を行い、書くことに対する所属校児童の意識を分析した。

その結果から、書くことは、児童の約6割は好きであるが、学年が上がるにつれて、好きな割合は減る傾向にあり、書くときに何らかの困ったことを感じている児童が多い実態が分かった。

さらに、書くときに困ったことは、内容や方法の面が多く、書くときに気をつけていることは、書字に比べて、思考の面は少ないことが分かった。

2 検証授業による実態把握と観察カードの分析

- (1) 検証授業（3年生）の実際

先の実態調査を受けて、6、7月に、所属小学校3

年生の国語科の時間に「書くこと名人になろう」ということで、授業実践を行った。

最初の授業では、それまでに理科の時間に書いた観察カードを友達同士で読み合い、書き方のよいところを出し合った。そこで出されたものを書く際の観点として挙げて、「書くこと名人とらのまき」を作成した。

この授業では、これまでの理科での学習経験などを生かして、指導者の事前の予想以上に多くの観点が児童から出された。

次の授業では、「書くこと名人とらのまき」をもとに、観察カードを振り返り、自分の書くことの傾向を知り、次に書くときに生かしていくことをねらった。

(2) 観察カードの分析と考察

3回目の授業は、その直後の理科の授業で花の観察を行うことを動機付けとして行い、直後に学級担任の指導で理科の授業を行った。ヒヤクニチソウとホウセンカの花の咲いた様子の観察を行い、前時に考えたあてをもとに、観察カードを書いた。

その際に、「とらのまき」の観点として意識して書いている児童とそうでない児童が見られると共に、思ったことや思考に関わる言葉も見られた。

以上の記述に関連する児童に、個別に聞き取り調査を行った結果、全体的に「とらのまき」観点と、実際書かれたものの相関は希薄であったので、書き方の観点を意識して書けるようにする手立ての検討の必要性が生じた。

7月までの実態調査や授業実践を通して、以下の3点に研究を焦点化し、9月以降の検証授業を行った。

①メタ言語活動における低・中・高学年の発達段階の検討

②理科（観察カード）以外の他教科の成果物（新聞）を学習材にした実践を通した、汎用性の検証

③書くことの観点を意識させるための具体的な指導の手立ての検討

以下では、以上の3つの点について明らかになったことを述べる。

3 メタ言語活動における低・中・高学年の発達段階検証授業を行い、以下の様な特徴が明らかになった。

(1) 体験重視の段階（低学年）

低学年におけるメタ言語活動では、「思ったこと」や「感じていること」をよく伝わりとして指摘して、具体物や体験が、書く内容に与える影響が大きいことから、「体験重視」の段階と言える。

(2) 観点抽出の段階（中学年）

中学年の実践では、観察カードの書く際の観点を指

摘でき、書く際の観点の他の文章への応用が見られたので、「観点抽出・応用」の段階と行うことができる。

(3) 効果意識の段階（高学年）

高学年では、効果的な感想の書き方の観点を多く指摘することができ、授業後に書いた新聞で読み手を意識した書き方ができていたので、「効果意識」の段階と言える。

4 メタ言語活動の学習材となる表現形式

(1) カード（観察カード・生活科カード）

初めの段階で、3年生では観察カード、2年生では生活科カードを学習材として実践を行った。その結果、どちらの実践でも、級友の観察カードから、よいところとして、「大きさ」、「手ざわり」、「色」、「くらべる」、「たとえる」等の観点を抽出することが、容易にできていた。

(2) 新聞

3年生の実践では、水泳納会新聞を学習材として行った。よく書けているところを探す活動を行ったが、新聞独特の形式への指摘は、ほとんど無かった。

6年生では、互いの新聞を読み合い、書き方のこつを見つけたが、表記の方法的な発表に偏った。

5 メタ言語活動の実践

児童が書いたものを学習材として、互いに読み合うメタ言語活動では、どの実践の場合も、意欲的に集中して行う様子が見られた。

書くこと名人カードは、1枚1観点として、リングで束ねて、各自で携帯しながら使用する形式を用いた。各自で観点を見出したり、学級で確認したりしながら、書き加えていくためにもリングの形式は有効だった。

また、3年生では、観点の一覧を「書くこと名人とらのまき」として、教室に常掲した。常掲することで、他の書く場面へ汎用する様子も見られた。

IV 考察

本研究の成果としては、まず、メタ言語活動の実践を通して、先述した発達段階を見出すことができたことが挙げられる。この発達段階を考慮しながら、指導すると、他の書くことに学びを生かすことができている場面も見出すことができた。

また、メタ言語活動を通して抽出した観点を、児童が他の学習で汎用する様子が見られた。児童が観点について意識できるように教師が意図的に働きかけることで、汎用する範囲も広がると考える。

課題としては、児童の課題意識が薄かったことや、カリキュラムへの位置付けの問題が残った。